

immortal noctiluca

イモータル・
ノクティルカ

L to R:天田優子(vo,g)、森空青(co-Produce,g,b)

全部イメージ通りで見届けているから
自信を持って良いって言える



グリーム

AI kNow Records 発売中
AINR-0001 2,000円 (税別)

joyの活動でも注目を集めてきた天田優子。解散後は弾き語りを中心としたソロ活動も展開してきたが、新ソロプロジェクトimmortal noctilucaを始動！ 新進アレンジャー／ギタリストの森空青とタッグを組み、驚くほどスピーディに1stミニアルバム『Gleam』を完成させた。immortal noctilucaは“不死の夜光虫”の意で、その歌詞にもサウンドにも天田の思想、メッセージがたっぷりと詰まっている。オルタナ、ポストロック以後のサウンドイメージを独自に昇華するとともに、森と共に編んだシングルコイルのギターアンサンブルがとにかく鮮烈な仕上がり。ライブ活動もスタートし今後の活動に期待が高まる！

◎

二人はどうやって出会ったんですか？

天田：空青さんがスーパーファミコンの音楽をカバーしているバンドを観に行っただけです。

森：アレンジャー、ギタリストとしていろいろな仕事をいただけてきたんですけど、一方で自分のしたいエンタテインメントの形も色々構想があって。それでいっそ好きなことをやろうとゲーム音楽をカバーするバンドを始めたら、知人の紹介で彼女が観に来てくれて。ライブで1曲歌ってもらったりしたんです。

天田：その頃私はやりたいことの構想はあったけどどう動いていいかを悩んでいて。作りかけの曲もいっぱいあったけど、そこからどうすればアルバムになるのかがよくわからなかったんです。空青さんに会った時に“この人だったら…”っていう直感があったから。勇気を出して私のデモを聴いてもらったら、彼がベースを入れて送り直してくれて。森：彼女のやりたいことをなるべく鮮度を保ったまま押し出してあげれば、面白いものができるなっていうアンテナに引っかかって。

天田：そしたら曲が劇的に良くなって号泣したんですよ(笑)。“私がやりたいことは間違ってたんだ！”って。アルバムを作ってた時、空青さんは“私が正しいと思ったことが正解だよ”って言ってくれたんです。そこからはサクサクと進みました。アルバムは基本的に二人で作った感じなんです。

「マーベリック」のインパクトたっぷりの前奏は最初からあだったんですか？

森：一瞬何のコードが鳴っているのかもわからない(笑)、不協和音のようなドキとする始まり方で、メロディに入った時の“あ、そういうことだよ”って感じが衝撃的すぎて。

天田：全然そういう自覚がなかった(笑)。

森：オルタナティブな部分とかドラマの感じとか、良い意味でjoyを裏切るイントロだなと。“この人にはこういうのも頭に鳴っているんだな”って思ったんですけど。

天田：joyとは違う別のことがやりたいと思って作った曲なんですよ。

生ドラムに聞こえますが、実は優子さんがリズムを打ち込んでいるんですね？

天田：それ皆に言われる(笑)。そうですね。

今のところ案外ドラマーを騙せていますね。

森：生ドラムって案もあったけど、今回は死ぬほど細かく打ち込むほうがいいだろうと。

天田：だから純度が高いというか、全てイメージ通りにできたとし、全部見届けているから自信を持って良いって言える。楽しかった。

お二人がシングルコイルのギターサウンドで統一しているのも特色ですね。

天田：私はムスタングの音が大好きなので(笑)。空青さんに“ギター何使ってますか？”って聞いたら、“immortal noctilucaはTLタイプだと思うよ”って言うてくれたから、“そうですねそうですね！”と思った(笑)。

森：以前からG'Seven Guitarsにお世話になっていて、ヴィンテージテイストのあのTLタイプが合うと思ったんです。ベースはフェンダージャパンのジャズベースでしたね。

「風」も美しい楽曲で、お二人のアコギがフィーチャーされていますね。

天田：私のマーティンを二人で弾きました。NATSUMENも好きですけど、アメリカン・フットボールとか、普段ああいいうインストが好きなのからきているのかな。

森：最初ハーモニクスのフレーズをもらったんですよ。このドラムソロは“僕がドラム上

手かったらこう叩く！”って言って、めちゃくちゃ気合い入れて打ち込みましたね(笑)。

「end.」は激しいファズギターが!!

天田：それまで“ファズなんて私が踏んでは駄目だ”と思い込んで我慢していて、“やっと踏める時がきたか！”って(笑)。

森：僕はむしろ“ファズいいんじゃない？”って。“ピアノバラードと見せかけてこうなるのね”って笑っていたんですけど(笑)。

天田：最初のデモでピーッというフィードバックの音は入っていたから察してくれたのかと(笑)。この曲もライブでやったら皆凄く良いって言うてくれた。

『Gleam』は透明感がありつつも生々しいバンドサウンドでトータリティがあり、夜の海のアートイメージもピッタリですね。

天田：全部イメージ通りにできました。予想外のことは起きないからストレスがなかった。

森：面白いものに絶対なるって思っていたので、予想外のことが起きないよう、レコーディング前に予想内のことを全部終わらせて。

immortal noctilucaはその名の通り終わることなく継続していくのですか？

天田：うん、もうずっとやりたい。空青さんには長生きしてもらって(笑)。

森：さすがに50年も60年も経てばその頃は一人でも大丈夫なんじゃないの(笑)？ また次のアルバムを作るために頑張ろうと。

天田：あと海外でもやりたいんです。今まではこんなこと考えたことなかったけど…。

森：イギリスやフランスの人達に好んで聴いてもらえるのかなというイメージがあって。

天田：海外に行ってムスタングを弾きたいんです！ (北村和孝)



Masanori Morino